

## 【出題の意図】

### 2026 年度 大学院社会学研究科 修士課程【秋期一般選考】入学試験 論文試験問題

問題番号	問題名	出題の意図
問1－(1)	社会学研究Ⅰ (社会理論)	マルクスとヴェーバーが提示した二つの階級概念は、いずれも、社会学の基礎概念であり、この学問分野において有力な理論的・方法的な立場を形成・支持してきた。二つの違いを記述させ、社会学理論に関する基礎的な理解度を判断することを意図した。
問1－(2)	社会学研究Ⅰ (社会理論)	社会の集合的主観と客観的現実の関係は、デュルケーム、ウェーバー以来、社会学で多様な形で問われ続け、ブルデューやギデンズらにおいて総合を図られてもきた根本問題である。これについて特定の理論・学説を取り上げ自分なりに解説し、具体的な事例に即して議論を展開することは、これから社会学の営為をおこなう上で根幹の知識や素養、経験、センスを発揮することにつながる。
問2－(1)	社会学研究Ⅱ (社会学方法論)	「ジェンダーの視点」を用いることが社会学の方法論において果たす役割についての理解を問う設問。ジェンダー概念の複層性をふまえ、視点の導入の有無が社会学的な分析にもたらしうる差異を具体的に論じさせることで、ジェンダー研究の方法論的意義を把握しているかを評価する。
問2－(2)	社会学研究Ⅲ (社会学方法論)	母集団から標本を抽出する方法全般についての正確な理解と、分析結果を解釈するときに(非)標本誤差をどう処理すればよいのかに関する専門的な知識について、確認する。
問3－(1)	社会学研究Ⅲ (社会学各論)	「人種」概念、レイシズムの歴史的変容、そして現代的なレイシズムの特徴についての理解度をはかることを意図した設問。人種主義をめぐる議論は多岐にわたるため、受験者が複数の学説を具体的な事例と接合させ、批判的に論じられているかを評価する。
問3－(2)	社会学研究Ⅳ (社会学各論)	(i) 【解答】ノードAの入次数は0。 (ii) 【出題の意図】社会ネットワーク分析に関する基本的な用語を説明できるかどうかを調べる。そのうえで、これらの用語を実際の社会現象に即して説明できるかどうかを問う目的での出題である。
問4	共生社会研究Ⅰ (教育と社会)	教育の社会的機能に関する解答者の理解度を把握するとともに、今日的な課題に対し、教育が何をなすうのかを問う問題である。教育学(教育研究)は学際性を特徴とするため、解答者の立脚する学問分野や方法論の多様性を許容しつつ当該分野に関する知識をどの程度習得しているか、その把握を意図している。
問5	共生社会研究Ⅱ (スポーツ社会学)	スポーツ研究の社会科学的研究について基礎的な知識をどの程度把握しているか、また文化研究についての理解度を測る意図。一般的な「スポーツ」や「文化」の理解を基盤とするのではなく、学術的な研究の基礎的知識が解答として求められる。
問6－(1)	共生社会研究Ⅲ (社会政策)	福祉国家は、近代および20世紀に成立した多様な諸制度および思想を背景としており、またこの点に対して多くの研究が存在している。これに対してどの程度の知識を有しているかを問うことで、社会政策分野において研究する準備ができているかを評価することができる。
問6－(2)	共生社会研究Ⅲ (社会政策)	回答者が1)日本の労働社会や制度に関して基本的な知識を有し、その内容や問題点についても理解しているか、2)上記について学術研究を踏まえているか、3)論理的思考力があるか、4)自分なりの発想力があるかを測ることを意図している。

問6－(3)	共生社会研究Ⅲ (社会政策)	地域政策の典型である人口移動の誘導について、実際に取り組みられている政策に関する知識を確認するとともに、その政策における必要性と課題に対する解答を通じて論理的思考力および洞察力も確認する。
問7－(1)	歴史社会文化研究Ⅰ (日本史)	商品経済の発展と経済格差の拡大に直面した近世後期の村落共同体の変容に関する理解を問う設問である。近世村落社会の変容過程に関する基礎的な理解度を把握することを意図している。
問7－(2)	歴史社会文化研究Ⅰ (日本史)	戦後日本の社会運動をめぐっては、歴史学および隣接諸学のそれぞれから、固有の問題意識にもとづいて研究が蓄積されてきた。そのような研究史に対する知識や理解、およびそれらをふまえたうえで任意の運動について論を組み立てる構想力・構成力をはかることを意図している。
問7－(3)	歴史社会文化研究Ⅰ (日本史)	近代日本における治安法制や出版規制がどのような構造を有し、それが大正デモクラシーや占領改革などを経てどのように変容していくのかを問う問題である。「政治的表現の自由」という視点から、国家と社会の関係を歴史的に考察させることを意図している。
問8	歴史社会文化研究Ⅱ (アジア史)	近代のアジア史を考察しようとする際に、帝国主義の問題は避けては通れない。そこで、本設問では、東アジアにおける帝国主義の展開に関して、研究史への理解度をはかるとともに、整合的に論述する力を問うことを意図した。
問9－(1)	歴史社会文化研究Ⅲ (アメリカ史)	アメリカ合衆国史の主要テーマとその研究動向について解答者の理解度を把握することを意図した設問である。
問9－(2)		
問10	歴史社会文化研究Ⅳ (ヨーロッパ史)	ヨーロッパ史における国家主権の形成と変容、それと連動した国境の意味と機能の変化とその要因・影響を、中長期的な歴史的視座に立ち、かつ、具体的な事例を適切に位置づけながら考察する視座を身に着けているかをみる設問である。政治史、政治思想史、国際関係史、国際法などの観点からだけでなく、経済史、社会史、文化史などの観点からの考察も可能である。
問11－(1)	歴史社会文化研究Ⅴ (哲学・社会思想史)	〈価値〉は哲学・倫理学における鍵概念である。人々の態度や感情に注目する価値概念へのアプローチは、伝統的議論にも見られ、近年では分析哲学を中心に盛んに論じられている。そうしたアプローチについての理解度をはかることを意図している。
問11－(2)	歴史社会文化研究Ⅴ (哲学・社会思想史)	大衆社会論についての設問。当該思想家の学説の特徴と限界を、時代背景とあわせてどれほど理解しているかを評価する。思想家の選択肢は、20世紀の大衆社会論、古代や19世紀の民主政論、マルクス主義など、さまざまな時代・潮流に及びうる。
問12	歴史社会文化研究Ⅵ (文芸思想)	何をもって文学とするか、また何をもって理論とするかは議論の余地があるが、文学の言葉が何を語り、何を行うのかについての自身の主張を、何らかの先行研究に依拠しつつ展開できるかを問うている。
問13	歴史社会文化研究Ⅶ (言語学)	近年、言語社会学、遅れて、音声記述言語学において、手話について論じることが多くなっている。解答者がこうした傾向に関心を向けているかについて把握し、また、音声やリテラシーを主な研究対象としてきた言語学による手話の分析にどのような特性と限界があるか省察する力を確かめる。
問14－(1)	超域社会研究Ⅰ (社会心理学)	人の向社会、環境行動に影響する要因についての研究の熟知度と説明の明快さを測ることを意図した設問。促進する変数としてはアイデンティティや目の絵、メカニズムとしては感情や評判への懸念、阻害(あるいは調整)変数としては、他者の存在や規範などが挙げられるが、それに限らず明快さと論理性を審査の対象とする。

問 14－（２）	超域社会研究Ⅰ （社会心理学）	心の文化的・生態学的・進化的基盤に関する主要な理論・実証研究・方法の理解度をはかるとともに、それぞれのアプローチを比較し、批判的に検討する力をはかるとを意図した設問。
問 14－（３）	超域社会研究Ⅰ （社会心理学）	（Ａ）は、メディア効果研究の中で、重要な位置を占めているマスメディアの議題設定機能について理解をはかるとを意図した設問。（Ｂ）は近年、研究手法として重要になっているウェブ調査について理解をはかるとを意図した設問。
問 15	超域社会研究Ⅱ （社会／文化人類学）	（１）は、社会／文化人類学における基礎的な概念についての理解度をはかると、（２）は、フィールドの状況に柔軟に対応しながら調査の大枠や記述・分析の枠組を修正していく人類学的なフィールドワークについての理解度をはかるとを意図している。
問 16－（１）	超域社会研究Ⅲ （政治学）	政治学（特に政治行動論分野）において頻繁に取り上げられる重要なトピックについて、主要な概念の理解度や、それらに関する研究動向に対する知識をはかるとを意図した設問である。
問 16－（２）	超域社会研究Ⅲ （政治学）	比較政治学では統計などを用いた量的手法と少数事例を対象とする質的研究の相互補完のあり方について議論が蓄積されてきた。それらの概要を正しく理解し、自らの研究課題と結び付けて議論できるかどうかを問う問題。
問 16－（３）	超域社会研究Ⅲ （政治学）	各国の政党にとってソーシャルメディアが選挙キャンペーンにおいて欠かせない情報伝達ツールになってきたが、その具体的なケースについての知識・情報を持っているかどうかを問う。そして、そのケースにおいて、なぜ政党がその戦略を選んだかについて考えているかどうかを問う。
問 16－（４）	超域社会研究Ⅲ （政治学）	国際平和を検討する上で貧困から紛争まで様々なとらえ方ができるが、有限な資源をどのように配分するのか、国際政治における正義についての捉え方に関する基礎的知識をはかるとを意図した設問。理論面・実践面・思想面など様々な角度から説明できるようにしており、ロールズの正義論や保護する責任論以外の理論を援用した解答も可とする。
問 17－（１）	超域社会研究Ⅳ （環境と社会）	近年の地理学において、地理情報システム（GIS）が果たす理論的・実践的役割を理解しているかを評価するとともに、GISが自身の研究にどのように関与し得るかを具体的に説明する力を問うものである。GISの応用可能性や限界についての批判的思考を含めて論じることが期待される。
問 17－（２）	超域社会研究Ⅳ （環境と社会）	自身の研究領域に関する知識を問うとともに、それらの知識を当該問題に関する研究史に定位する力量をはかるとを意図した設問。分節化された断片的な知識の羅列ではなく、点と点を束ねる視点が示されていることが期待される。